

ワイルドの服飾観—アーネストを中心に—

佐々井 啓

『The Importance of Being Earnest』は、ワイルドの喜劇のなかでも最高傑作といわれている作品であり、すでに多くの研究がなされている。しかし、本論では、アーネストの登場人物の服飾描写を検討することによって、テキストに示された服飾と舞台衣裳との関係を、初演時の写真やスケッチなどを資料として検討する。さらに、それらの服飾が、当時の流行の服飾とどのように関わっているのか、という点を考察し、最後にワイルドが服飾に表現しようとしたことを明らかにする。

1. 舞台における衣裳

アーネストについて考えるうえで参考になるのは、1892年2月20日に初演され、大成功であった『ウィンダミア夫人の扇』である。この作品は、アーネストと同様に、ジョージ・アレクサンダーによってセント・ジェームズ劇場でなされたものである。

『ウィンダミア夫人の扇』では、ジョージ・アレクサンダーと妻のフローレンスは新しいドレスメーカーに衣裳を依頼したが、この劇が大評判となったことによって、このドレスメーカーは、セント・ジェームズ劇場の衣裳を担当するいくつかのメーカーのひとつとなったのである。

このように1890年代では、パリのクチュールの影響から脱したロンドンの新しいドレスメーカーにとって、舞台衣裳は大変魅力のあるものであった。また、パリのクチュールのドレスを身にまとった上流階級の人びとは、彼ら自身もまた注目される存在であったわけで、このことは「ステージ、ストールズ、ギャラリーの覗き見的な三角関係の完成である」と述べられている⁽¹⁾。

このような状況について、当時の雑誌には、ロンドンの舞台が新しい流行発信の場となりうることが述べられている。観客はそこで上演される劇の人物たちの新しいドレスから流行の情報を得ようとしていたのである。これは、イギ

リスのドレスメーカーが舞台衣裳によって大きく発展していったことを示しているのではないだろうか。

それでは、アーネストの初演の様子を述べている記事をみてゆきたい。

フローレンスは、セント・ジェームズ劇場の衣装担当であったが、それぞれの場面の装飾に合うようにガウンを注文した、と述べている⁽²⁾。また、舞台衣裳は、やや極端に用いることで効果があり、人々は、新しいガウンを注文する前にセントジェームズの劇を見にくる、ともいう⁽³⁾。彼女自身、「最新流行の、やや奇抜な衣裳を身につけていた」と評されていたのである⁽⁴⁾。

また、初演当日の劇場の人々の衣裳についても、さまざまな雑誌で紹介されているが、若い男性は、黒檀のステッキに鈴蘭の花をボタンホールにつけ、白い手袋、先の尖った靴をはいた流行の装いであり、女性は、すばらしく整えられたドレスに百合の花のブーケを胸や髪につけている⁽⁵⁾。

このように、舞台衣裳ばかりでなく、観客の流行の先端をいくような洗練された衣裳が紹介されており、劇場がファッションにおいて果たした役割は大きなものであった。

2. Earnest の登場人物と衣裳

Earnest の登場人物の衣裳について、*The Sketch* 1895年3月20日号に掲載された写真と、他誌のスケッチから説明する。

(1) 男性の衣裳

まず、1幕では、ジャックはフロックコートを着ているが、アルジャノンは、フロックコートより略装のモーニングコートで、スカーフ状のタイと衿付の薄色のウエストコートを組み合わせ、ボタンホールに花をつけている(図1)。

ここは、グエンドレンがジャックの田舎の住所を聞いているところで、すぐにアルジャノンが「その住所をワイシャツのカフスに書きつけ」る場面となる。

次に2幕では、ジャックが喪服で登場する場面があり、次のように記述されている(図2)。

黒づくめの正式の喪服、黒い絹の喪章を帽子に巻き黒の手袋をはめている⁽⁶⁾。

ここでは、喪服については簡単に説明されているのみであるが、写真や雑誌の説明によると、黒いステッキと黒い縁取りのあるハンカチーフが用いられている。当時の喪の服装は、黒いフロックコートとヴェスト、濃い色合いのトラウザーズ、黒いネクタイと黒いシルクハットに喪章である黒いバンドをまくものであり、黒い縁取りのハンカチーフを用いる、と記されている⁽⁷⁾。

また、2幕の終わりに、洗礼の話をしながら、マフィンを食べている場面では、ジャックはラウンジスーツを着用し、結び下げるストライプのネクタイをしめている。アルジャノンは、チェックのスーツであり、この服装は、1幕の終わりでレインに旅支度を命じている場面に登場している(図3)。

アルジャノン (略) 礼服(dress clothes)、喫煙服(smoking jacket)、その他バンベリー用の服(all the Bunbery suits)を全部入れといてくれ……⁽⁸⁾

礼服はイブニング用のコート(燕尾服)であり、喫煙服は、ゆったりしたラウンジコートである。これはくだけた装いとしてさまざまな素材で作られた洒落たコートであった。縁取りや折り返しに表地と対象的な色を用いたものもあった。バンベリースーツはワイルドの造語であるが、田舎に出かける時のスーツを意味している。この後に続く会話は、上演の際にアレクサンダーが省略した部分であると記されてる⁽⁹⁾。

レイン それらのひとつのチェックのスーツが少し傷んでおりますが。

アルジャノン ああ、そうだ、思い出した。それでは、他のスーツは皆大丈夫だろう。

「チェックのスーツが傷んでいる」という言葉から、それらは郊外に出かけたり、スポーツをしたりする時のスーツであり、形はラウンジスーツと同形であったと考えられる。また、旅支度を命じる前に、アルジャノンはレインの持ってきた請求書を開封せずに破ってしまう場面があり、アルジャノンの経済状態が押し量られるのである。

さらにジャックとアルジャノンのジャケットを比較すると、アルジャノンのコートの方が後ろ裾が長くなっており、蝶ネクタイをしたモーニングコートに近い形である。1895年頃にラウンジモーニングコートという両者の折衷型がみられるが、これは実用的な素材のストライプやチェックで仕立てられたもので

あり、おそらく、この型のスーツではないかと考えられる。

(2) 女性の衣裳

グエンドレンのドレスは、多くのイラストにも紹介され、注目をあびていたものである。そこでは、彼女の2着のドレスはどちらも「シックでオリジナル」である、と説明されている⁽¹⁰⁾。

1幕で着られるドレスは、薄い黄色と青のストライプのシルクであり、胸にはヴェルヴェットのフリルがついている。大きな袖は、ヴェルヴェットの2本のタブとボタンで肘のところで留められており、衿は黒のヴェルヴェットで、ケープを上羽織っている。黒いストローハットは、青いヴェルヴェットのクラウンを持ち、黄色や青の花で飾られている(図1)。

2、3幕で着られるドレスは、流行の白いシルクに淡い色のスマイレの花輪を織りだした布であり、胴部は白いシルクやレースで覆われている。肩にはスマイレ色のシルクに白い透かしの刺繍のある胸壁状のカットのケープをつけている。帽子は濃いスマイレ色のストローハットに白い花や濃い色のスマイレのリースが飾られ、白いシフォンとレースの日除けがある(図4左、図5)。図4では、グエンドレンが手に眼鏡を持っているが、ここは、「長柄つき眼鏡でセシリーを注意深く観察してから」という説明の部分にあたる。

これらのドレスのデザインは、当時のファッション誌に紹介されているドレスとよく似ており、最新流行であるが、さらに「シックでオリジナル」なものであったといえよう。

ブラックネル夫人には、1幕のドレスのスケッチがある(図6)。これは、シンプルな形の金茶のヴェルヴェットであり、同じ素材のケープが組み合わされている。大きな衿には、周りに黒いシフォンのラッフルがあり、前中心には、黒いサテンのリボンのロゼットがついている。金貨が中央にあるボネットには金のカットがちりばめられ、黒いオストリッチの毛のまわりにピンクローズの房が取り巻いている。また、飾り鎖のついた金メッキの手帳を手に入れているが、「ポケットに手を入れて手帳と鉛筆を探」し、それを手にしてジャックにインタヴューをしている場面であることがわかる。

3幕のドレスの図はないが、つぎのような解説がある。斜めに狭いペチュニア色のサテンのラインがあるダークグリーンシルクのガウンの胴部はターコイズブルーのヴェルヴェットで、ペチュニア色のケープの裏にもターコイズブルーが使われている。ボネットもまたターコイズブルーのヴェルヴェットであり、レースの翼と極楽鳥の飾り羽と満開のピンクのバラの装飾がある。

このドレスについては、現代的ではあるがそれほどふさわしくない、という批評が載っている⁽¹¹⁾。

セシリーは、「薔薇の咲き乱れる古風な庭」で、「舞台奥で花に水をやっている」場面から登場する。この場面にもふさわしく、肩から下がるストライプのある白いサテンのドレスを着て、白い厚手のシルクのサッシュベルトを後ろで蝶結びにしている。白い経木の大きなガーデンハットには、白い縁取りとピンクのバラが飾られ、サッシュベルトにも同様の装飾がなされている(図4右、図7)。このドレスはたいへんシンプルであるが、trivialityの正確なタッチは、セシリーが木のベンチに腰を掛けるときに見える茶色の靴と靴下によっても与えられている、とある⁽¹²⁾。

なお、図8は、1895年2月23日の*Illustrated London News*に載った2幕の挿絵であり、左上はグエンドレンとセシリーのお茶の場面、下はジャックとアルジャンンがマフィンを食べている場面であるが、右上にワイルドの姿が描かれている。

このように、アーネストは喜劇としてたいへん評判になっただけでなく、衣裳もまた関心の的であったことが窺える。フローレンスが考えた以上にドレスは評判になり、場面と人物に合わせて最新流行の衣裳を取り入れていったことは、劇の効果を増すことになったのではないだろうか。初演時の衣裳の解説とそれに対するさまざまな評価を調べた結果、観客の舞台衣裳についての興味は、現実の最新流行の衣裳への興味と大いに関係があることがわかる。

したがって、観客が求める舞台衣裳は実際のドレスと似ているが少し新しい要素を持っていることが必要だったのである。

3. ワイルドの服飾観

これまでみてきたアーネストの登場人物の衣裳に加えて、ワイルドの服飾観が表れていると思われる部分を、他の作品をも参照して考察する。

まず、アルジャンンがセシリーと話をしている場面に、ジャックのネクタイの趣味について述べているところがある⁽¹³⁾。

アルジャンン ジャックに僕の旅行用品を買わせてなどやるもんか。ネクタイの趣味が全然ないんだから。

ネクタイはダンディにとって自己を表現する大切な部分であったので、ネクタイの趣味やその結び方は重要であった。

『つまらぬ女』のイリングワース卿の会話に次のような部分がある⁽¹⁴⁾。

イリングワース卿 (略) ところで、ジェラルド、ネクタイぐらいもう少しうまく結べるようにならなきゃいけないよ。ボタン穴にさす飾り花なら気分でやればいい。だがネクタイの基本はスタイルなのだ。ネクタイがうまく結べてはじめて人生への第一歩を真剣に踏み出したことになる。

ジェラルド (笑いながら) ネクタイの結びかたならなんとかなるかもしれませんが、イリングワース卿、(略)

このように、イリングワース卿によってダンディにおけるネクタイの重要性が述べられており、「ネクタイの趣味がない」ということは、ダンディであることを否定されるようなものであるといえよう。

次に、イリングワース卿が「気分でやればいい」というボタンホール飾り花について取り上げてみたい。

まず、アルジャンンがセシリーに薔薇の花をボタンホールにねだっている場面である⁽¹⁵⁾。

アルジャンン まず、胸につける花をいただけないでしょうか？まず花をつけないと少しも食欲が出ないんです。

セシリー 黄色の薔薇？

アルジャンン いや、ピンクの薔薇のほうが。

セシリー どうして？(一輪切りとる)

アルジャンン あなたはピンクの薔薇だもの、セシリー。

そしてアルジャンンはセシリーにピンクの薔薇を胸にさしてもらう。この場合、ボタンホールの花は、単なる「気分」より以上に、愛を表現するひとつの重要な手段であるといえるのではないだろうか。

また、『理想の夫』のゴーリング卿は、自他ともに認めるダンディであるが、次のような会話がある⁽¹⁶⁾。

ゴーリング卿 二番目の胸飾りの花届いているかい、フィップス？

フィップス はい、旦那様。

ゴーリング卿 いささか目立つな、フィップス。今のロンドンで何の取り柄もないくせに胸飾りの花などつけている男はわたしくらいのもんだ。

(中略)

ゴーリング卿 (鏡に映る自分の姿を眺めながら) この飾り花が好きだなんて思うなよ、フィップス。少し老けて見える、いや、男盛りにみえるかい、え、フィップス？

(中略)

ゴーリング卿 (略) これからはもう少し地味な花 *trivial buttonhole* をな、フィップス、木曜日の晩には。

ここでは、外出から戻ったゴーリング卿が、次の飾り花を胸につけている場面である。花が目立っていることを気にして、かえって老けて見えるのではないかという。そして、もう少し地味な花 *trivial buttonhole* を届けるようにと言うが、飾り花が地味であれば、逆にゴーリング卿がひき立つことになり、その意味で飾り花はダンディにとって重要な意味を持つのである。

しかし、このように飾り花にうるさいゴーリング卿も、最後にメーベルと一緒にいた温室から出て来ると、満足そうにメーベルの挿した新しい飾り花をつけていたのである。

さらに、『ウィンダミア夫人の扇』では、セシル・グレアムが、男性が失った女性の善良さ、無邪気さや純粋さに対して次のように言っている⁽¹⁷⁾。

セシル・グレアム おいおい、いったい全体ぼくらが純潔や無垢をぶらさげて歩きまわってどうしようってんだい？入念に考えぬいたボタン穴の飾りのほうがずっと効き目がある。

要するにボタンホール飾り花は、それをつける人物を表現するほどの意味を持っているといえるのではないだろうか。

このように、ワイルドは、ボタンホール飾り花についてさまざまな人物に語らせている。アルジャンンの「食欲がわからない」という言葉は、食欲旺盛なダンディにとっては、まず、ボタンホール飾り花をつけなければダンディとして存在しない、という意味に捉えられるのではないだろうか。

さらに、『Phrases and Philosophies for Use of the Young』には、次のような記述がある⁽¹⁸⁾。

真によく作られたボタンホールの花は Art と Nature の唯一の絆である。

この言葉から、ワイルドがいかに飾り花にこだわっていたかが理解できるだけでなく、彼は飾り花にダンディとしての生き方を象徴させ、さらに飾り花には彼の芸術論の一端が表現されていると言えるのではないだろうか。

さらに、ジャックが喪服を着て登場した場面について、再び考えてみたい。アルジャンンは自分を追い返そうとするジャックに対して、次のようにいっている⁽¹⁹⁾。

アルジャンン きみが喪に服しているあいだは絶対に帰らん。薄情にも程がある。ぼくが喪に服したらきみはそばにいてくれるだろう、なあ。さもなけりゃあ友情もへったくれもあるもんか。

ジャック じゃ、着替えたら帰ってくれる？

アルジャンン うん、暇がかかりすぎなきゃな。きみほど着替えに暇がかかって、そのくせちっとも見栄えのしない奴もめずらしい。

ジャック まあ、とにかく、きみみたいにいつもめかしすぎる over-dressed よりはましさ。

アルジャンン 時には少しめかしすぎるとしてもだ、その分はすごく学がありすぎる over-educated ことで埋め合わせがついてるぜ。

アルジャンンは、ジャックの服装に対して、そんななりは好かない、子供じみている、と言っている。喪服を着ている間は絶対に帰らない、と、さらに言葉が続ける。この場面は、最も観客が笑ったと伝えられているが、ジャックは「グエンドレンが結婚してくれたら弟は殺す」と言っており、それを実行したのが喪服で登場することだったのである。服装は、言葉で伝えるよりも早く、一目で観客にジャックの意図を伝えるものである。したがって、この場面が、強烈に人々に訴えるものであったことは、ワイルドの計画が成功したと言えるのではないだろうか。

さらに、アルジャンンは、ジャックの着替えについて、「暇がかかって、見栄えがしない。」という。するとジャックは、アルジャンンがいつもお洒落をし過ぎている、と応酬する。それに対してアルジャンンは、over-educated であることで埋め合わせをしているのだ、と言うのである。このような内容は、'Phrases and Philosophies for the Use of the Young'にもみられる⁽²⁰⁾。

ときとして少しめかしすぎていること over-dressed に対する唯一の償いは、いつも絶対的に学があること over-educated による。

ここでワイルドは、着飾っていることは、over-educated によってのみ償われるものであるといい、アルジャンンに自分の姿を重ね合わせているのではないかと思われる。

最後に、ワイルドが、舞台衣裳について述べている『仮面の心理』を引用してみたい⁽²¹⁾。

服装は正確でなくても美しくさえあればよい、というリットン卿の提案は、衣裳というものの性質と、その舞台上の価値との誤解に基づくものである。この価値は二重で、絵画的でかつ劇的である。つまり前者は服装の色彩に、後者はそのデザインと特性（役柄）によるのである。

服飾はひとつの生長、ひとつの進化であり、各世紀の生活の作法、慣習および様式の極めて重要な、おそらくもっとも重要なしるしである。

ここでは、衣裳の本質と舞台上の価値という点について述べているが、ワイルドは、しばしば、衣服における色彩の美しさについて言及している。たしかに、色彩の印象は衣服にとって重要であり、まさに第一印象は色彩にあるといってもよいであろう。しかし、舞台においては、単に服飾の価値のみでなく、舞台固有の服飾表現がなければいけない、と解釈できる。要するに舞台衣裳は、デザインと登場人物の役柄に合っていなければならない、といっているのではないだろうか。実際、服飾は、これまでみてきた登場人物の性格や身分、そして生き方やときには経済状態まで表わしているのである。このように、舞台衣裳は、ストーリーを進めていくために、観客に分かる dresscode (服装規定) を用いながら、それを誇張し、さらに一般の人々より一歩進んだ流行を提示していると言えるのである。

また、服飾は、生長し、進化し、それぞれの時代の人々のさまざまな生き方を示す最も重要なしるしである、とワイルドは述べている。彼は喜劇のなかで、自分の生き方のある部分を、しかし最も重要な部分を服飾において示そうとしたのではないだろうか。先に引用した The Sketch に、「ワイルド氏は、初演の日のカーテンコールで、The Importance of Being Oscar と感じていたに違いない」という記事がある。ワイルドは、'The Importance of being Earnest'において、まさに、Oscar 自身を表現したのだと思われる。

本稿は、第24回ワイルド学会秋季大会（1999年11月27日、於実践女子大学）において口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

本研究は、1999年度国内研修によるものです。研修を受け入れて下さいました駒澤大学大学院人文科学研究科英文学専攻、ならびにご指導いただきました荒井良雄教授に深謝いたします。

また、写真や挿絵などの貴重な本間コレクションの閲覧と撮影を許可していただきました実践女子大学図書館および、澤井勇理事長に厚く御礼申し上げます。

注

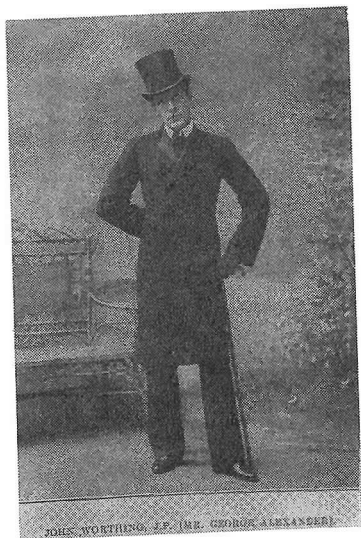
- (1) Kaplan, J., Stowells, S., *Theatre and Fashion*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1977), p.8.
- (2) Donohue, J., Berggren, R., *Oscar Wilde's THE IMPORTANCE OF BEING EARNEST*, (The Princess Grace Irish Library: 10, COLINSMYTHE, 1995), p.45.
Mason, A. E. W., *Sir George Alexander & St. James' Theatre* (New York: Benjamin Blom, Inc., Reissued 1969), pp.227-8
- (3) Donohue, Berggren, *ibid.*, p.49.
Mason, *ibid.*, p.233
- (4) *The Sketch*, 20, Feb., 1895, p.210.
- (5) Peason, H., *The Life of Oscar Wilde*, (London: Methuen & Co. Ltd. 1946), p.256
- (6) Wilde, O., "The Importance of Being Earnest", *The Complete Works of Oscar Wilde*, (London, Collins, 1994), p.380. 以下の引用は本書による。
なお、全体にわたって西村孝次訳のオスカー・ワイルド全集（東京：青土社、1989）を引用、および参照した。
- (7) Cunnington, W., & P., *Handbook of English Costume in the 19th Century*, (London: Faber & Faber, 1970), p.324.
- (8) "The Importance of Being Earnest", *op., cit.* p.374.
- (9) Donohue, Berggren, *op., cit.* p.192.
- (10) *The Sketch*, 20, Feb., 1895, p.210.
The Illustrated Sporting and Dramatic News, 2, 30, March, 1895

Lady, Feb. 21, 1895

- (11) *The Illustrated Sporting and Dramatic News*, 30, March, 1895
- (12) *ibid.*, 2, March, 1895
- (13) "The Importance of Being Earnest", *op. cit.*, p.379
- (14) "A Woman of No Importance", Collins, p.493
- (15) "The Importance of Being Earnest", *op. cit.*, p.380
- (16) "An Ideal Husband", Collins, p.554
- (17) "Lady Windermere's Fan", Collins, p.452
- (18) "Phrases and Philosophies for the Use of the Young",
The Collected Works of Oscar Wilde, Miscellanies, Edited by Robert Ross, (London: Routledge/Thoemmes Press, 1993), p.176.
- (19) "The Importance of Being Earnest", *op. cit.*, pp.388-9
- (20) "Phrases and Philosophies for the Use of the Young", *op. cit.*, p.177
- (21) "The truth of Masks", Collins, p.1169.



1.



2.



3.



4.

The Sketch, 20, March, 1895.



5. *The Sketch*, 20, Feb., 1895



6. 30, March, 1895



7. 2, March, 1895

Illustrated Sporting and Dramatic News.



8. *Illustrated London News*, 23, Feb., 1895